

華頂禪師假名法語 完

188.84  
B98k  
W





188.84  
B98k



住友務氏寄贈

689323



一棒一喝。字少。本分。不守。  
本分。亦。是。首。藤。落。子。少。  
強。然。曰。廣。之。契。語。此。是。第  
一。義。分。這。個。首。藤。志。是。

序





第一義の如く。美言易者過

王保成春三月

高徳の謹序



華頂禪師假名法語

目錄

問話

某甲の問と答

附某甲の所問

妙慧上人あるべきやうの事

うすひまうし

西國巡禮する人の事

おとらうぬまの事

何某の老尼への示し

山居の事

目

三









佛生道徳四奇哉一切の生具都如來智多也  
法お長怒執着を以て不後得と不人永加  
曰多の多性昂佛情幻化也身印法身と又  
不見傳大士曰法佛在心致迷人向介求内  
懐無價之愛不後一生体と二生不只多也  
の執着して縁の糸向て執求す此のたふ  
抄求む不執着し法佛の六乃五覺の性を以て  
心と一もよ由て境替双民して何を行と  
てり多の種たもすといふも一楞嚴經曰空れ  
大覺の中へ生ずること海は一匹の散するごとし

有偏微差の因ハ皆其の依て生ざる所なりと  
其の盡十方世界山河大地森羅萬象を飽  
せふも從法佛性海中の一沤の如し山河大地  
羅萬象及我等ハ其の一沤中れ生ずる也  
たとへば人の牙れ肝膽腸痛脾胃皮肉骨髓  
大小腸鬚毛爪齒等皆一身中れ物なりと  
其の通塞十々百の出入を細考す阿波羅  
王及蚊蟻等凡此無情の極微細の小虫  
も其の理を具存すといふ毫髪も違はず  
阿波羅凡の十界を体具なくといふは心を







すまば三千の穢を呑具し。一と法界に通るは  
ふとをか。佛令徳広ふ識破するも平定  
中此後後の。定も日蓮の間歴の途中の  
用凡多を清記するふ事。何がぞ書解  
以ふえす。ふれめ。種は精神をゆい快ふ八  
後田中。ふ一刃を下し。大急後光を疑ふ。水  
を吞て。後。自知するも。分昭ふ。見性  
去ん。一。思。い。く。ん。が。見性せんとも。文。小。他  
た。一。巾。今。兄。有。覚。知。さ。る。屋。の。若。き。何。物。ぞ  
十二時中。四威儀の中。改。修。を。求。む。と。く

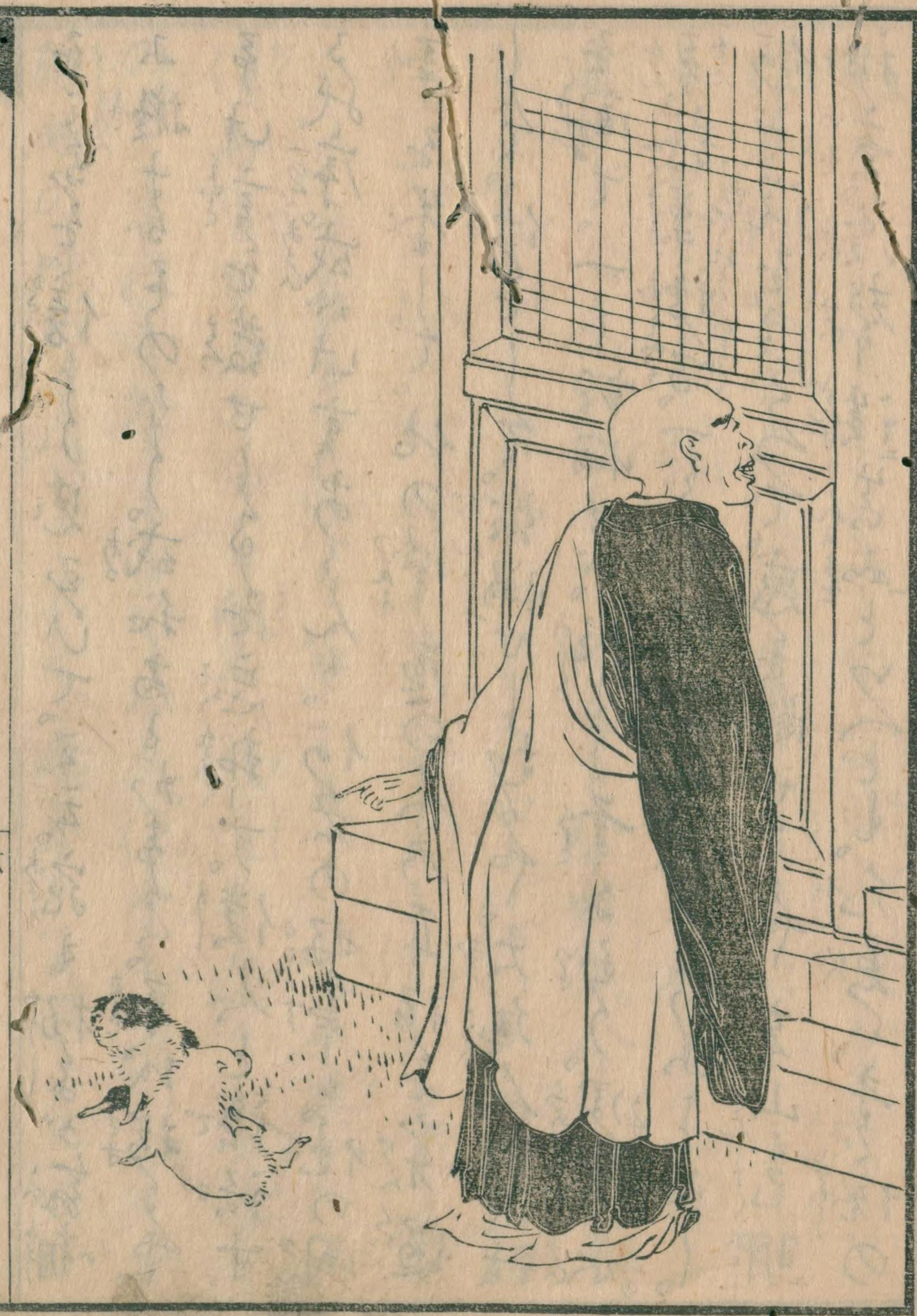
急。ふ。病。や。も。多。く。生。死。も。大。急。後。光。只。忘  
失。せ。ざ。り。ぬ。身。一。と。も。更。ふ。お。お。を。進。ふ。の。捷。徑。あり。  
昔。修。同。劫。州。狗。子。還。有。伴。性。也。多。川。曰。吾。と。  
其。什。磨。只。個。多。き。も。多。き。つ。の。一。圓。を。う。り。結。成。す。と。遠  
は。其。伴。多。少。の。公。案。一。と。不。言。は。り。き。不。悔。也。は。  
要。遠。國。庭。は。け。多。の。字。以。て。昼。夜。多。有。此。一。也。其。の。會  
を。な。す。し。と。り。く。有。多。此。會。を。た。は。し。と。り。く。義。路  
なく。義。路。多。く。心。熱。同。す。ふ。少。く。後。更。は。る。路  
み。く。箇。熱。鉄。丸。を。吞。ぐ。と。く。吐。と。も。吐。出。さ。し。後  
前。の。惡。知。惡。覺。を。足。跡。を。し。て。久。々。ふ。お。お。一。片



































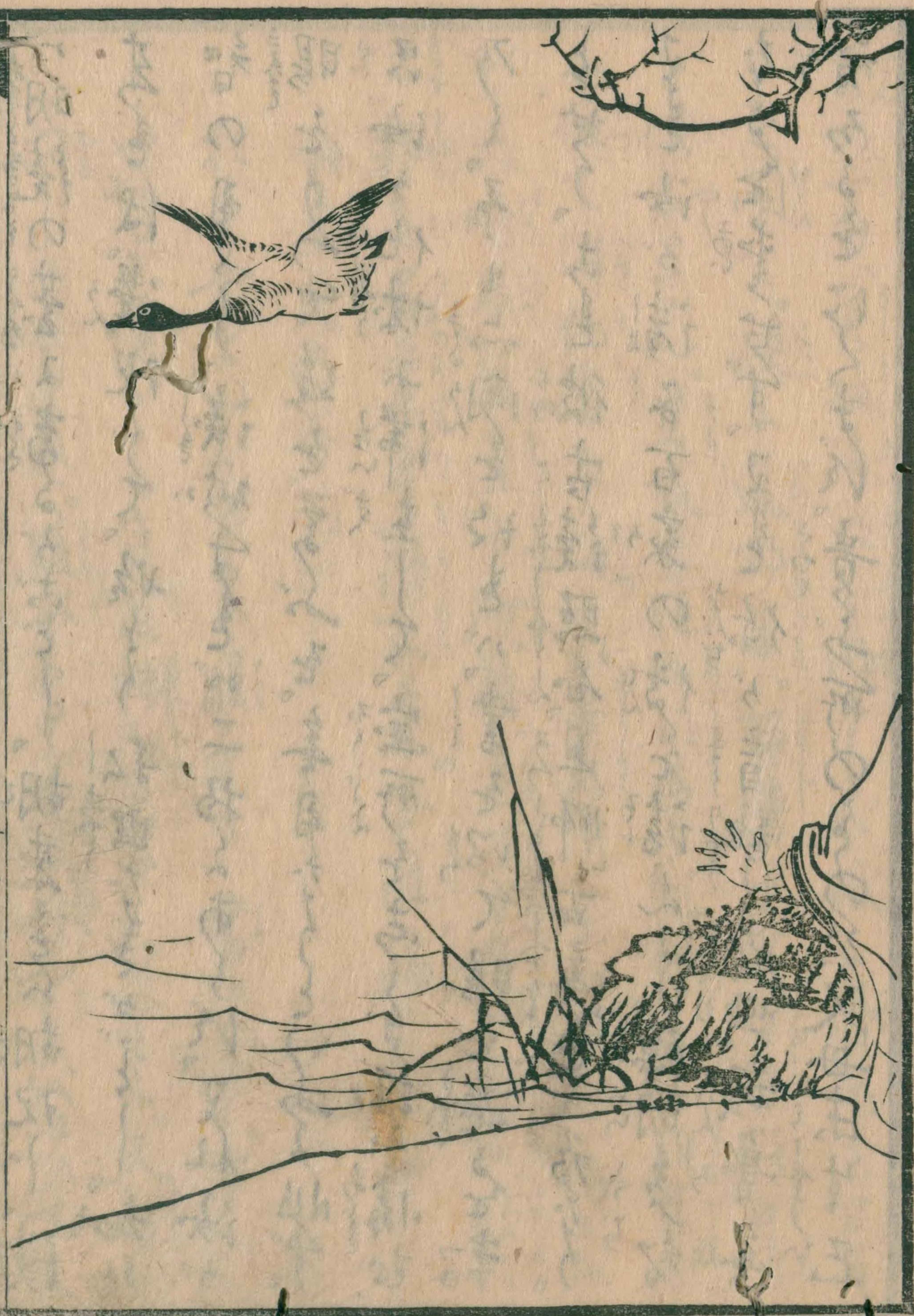


東山の演禪師、うつて白雲端和尙の舎下もとに在  
て、磨ま改かと名なる。一日端たん曰い、教けう禪ぜん客かくあり。唐山  
より來きた、皆みな者もの悟ご入に、伊いをして説とくむを、又  
説とく説とく端たん由ゆあり、圓えん縁えんを奉して伊い小せう問もんへハ  
又明あき坦たんうう、伊いをして下げ語ごせしむを、亦また下げ語  
坦たんうう、是こゝ未ま立たと、師しあらむを拈ねて大だい疑ぎハ  
潛ひそみ自みづか計かて曰い、已すで悟ごをう、説とく説とく明あき亦また明  
坦たん、汝なん何なに却かへて未ま立たを遂に余あま究きゆうすることと問もんふ、  
忽たち然ぜんとして省せ悟ごす、昔むかしの宝ほう惜しやく一時いつじ又また拈ねて  
走こて白はく雲うん又また見ま也や、雲うん為なるを小せう疑ぎ是こゝ論ろん、師し亦また一いつ笑せう

するのを、你又また曰い、和わ尙じやうハ禪ぜん理りハ心しんを用もちひまるを、  
去こゝろのを、物理ぶつりハ心しんを用もちひまるを、故ゆゑに  
と又また由ゆと云いふ、是こゝ又また何なにの回わい意い義ぎぞ、你なんぢ禪ぜんの外ハ物理ぶつり  
あり、物理ぶつりの外ハ禪ぜん理りありとするを、豈あや不ふ見み、諸しよ法ぽう皆みな  
本ほん來らい、常じやう自みづか寂じやく滅めつ也や、又また不ふ見み、治ち生じやう産さん業ごう皆みな与よ之し費ひ也や、  
又また不ふ見み、遠えん有ゆうと、こゝ物理ぶつりハ疎そまらず、宿しゆく因いんの感かんする  
所ところのを、我われも亦また心しんを用もちひまるを、又またいふすを、亦またやらむ  
た、去こゝろり亦また是こゝと又また理り拈ねて、又またいふけい何なにをら拈ねかんす  
るや、去こゝろり亦また理りの外ハ心しんを用もちひまるを、亦またいふけい何なにをら拈ねかんす  
汝なんぢ亦また他たの宝ほう所じよを拈かんすを、亦またいふけい何なにをら拈ねかんす









明統の甚まあるがごとく、胡来まひ胡現ど漢  
来まは漢現して、始より私照なきがごとく、  
智の用より、漢現すまは二物あるがごとく、  
眼をりつて道をまぶるを、無用なりといふは、  
只汝が化城に滞立して、宝所を去るが如きを、  
乃も予も心関をたきば、書を以て眼を遮るを常  
とせり。まは彼古統照心且師古を色がなる  
こそ汝が清る百家の傳を清んじ、聰明多智  
なるをせせず。こそ汝が盲目、癡、頑、魯、  
智あるをいへば、貴る所のものか。父母未生已

あの一句、多能辨は分ぬたふ、試は併ね未辨の  
口を用て、快ふ道ゆ来。那時予がゆち、此白持  
を供養せん。其或は道ふゆらば、併も難医、  
不依て僻地裏り向て、妄患するふ一任を、  
ど。大鵬展翼、蓋十洲、羅漢、燕雀、  
不招、  
附某氏の所同

たれよ、  
腹ふくまき、  
又情を  
腹ふくまき、  
十五











十七













○ 腦の法はつつたうと予よ幸きふ云い復ふくしてし自じををま

○ 一いち他たもも教き傳でんりりぬ

○ 言こときき身みののああららぶぶままややららふふ已おのたたくく照てるる日ひのの如ごとくく民たみをを懐あめ

○ 蒼あ生まれれああららぶぶままややららふふ作あげげままをを善あくくてて守ま君きみののもも成なるる

○ 人ひとのの身みにに天あまのの恨うらぬぬ身みああららぶぶららぶぶままややららふふのの人ひととと云いふ

○ 何なに事ことももつつららぶぶままややららふふにに如ごとくくばば身みののりりままももややすすくく係かりりをを

○ 卷まののああららぶぶままややららふふのの心こころををががららももののすすとともも轉くるるををああららぶぶ

○ 法はののああららぶぶままややららふふのの心こころををががららももののすすとともも轉くるるををああららぶぶ

○ 法はののああららぶぶままややららふふのの心こころををががららももののすすとともも轉くるるををああららぶぶ

○ 甚よのの人ひと乃あららぶぶままややららふふのの道みちのの甘あまいいををななららすすににままををまませせて

○ ああららぶぶままややららふふのの佛ほとけのの説とく法はつををああららぶぶままややららふふのの心こころををががららももののすすとともも轉くるるををああららぶぶ









○ 人の身はあらばまやしの常なりておふ同くまなすやある

○ おもひ入る心乃身をたづねばあるまやしの道も知るべし

○ 入るがま唐のち如乃通よりものまやしの心もまなす

○ 心すむまなす

古は曰く言ふ語句なり。一法の人ふとあるなり

と。志るあまは違傷の心を生何を以てりまなす

せんや故は千佛列祖止むことをばず曲て返報  
を返すものなり。又は拖泥滞水はあらずや  
ゆまとは法は法の美。あまはまなすまなすまなす天  
をわけて言ふあることなり。經曰く治は生産業時  
とまなすおほお違背と。法は佛は法は法の何の異  
あつあつんや。志るまなす異名のも。予瑞泉寓  
居の初農夫の白換。身ふたをまなすておくり  
根をまなすを吐甘まなすつらう法は法と。法を  
まなすまなすあまは法まなすまなすのまなす  
まなすまなすせてまなすかまなす人のまなす



なまきり人しを驚く人なり。  
迷ひありし其本とて今の一念もぬゆ  
うたしつゝあはれおのゝきぶ  
恨みかちてきよあはれきて  
おがけをを肯ひてまげて  
きぬるもたし浮巻の波ハ  
何よたと人浮巻のきゆを  
なよもとらまはし釣りの波よ  
あぶる月りの車はまじく  
あぶよのりもく浮巻のな

誰とてあはれあはれきを  
つゝきんも結白情  
君とかんてをとり痛  
ハツのせりの風ゆへ  
波乃あやみすごとくたを  
たもりけきよのさるべき  
のせてまが身を老の板  
つゝあはれあはれあはれ

うまはなげしぬ浮巻の中よ  
すつとて皆をまじく  
かへらるる人歩何ゆ神風  
浮巻いととてあはれ出て  
迷ひ恨しつゝまげあは  
不足あき身を不足とあは  
ほはあはれかきまはれず  
迷ひかよふに恨しを捨て  
うけけしあはれあはれ  
心建つて万別よき

うたはん乃やまじり  
すつとあはれを捨てて  
そめてを果すす衣  
きしてあはれ又しや  
あはれぬむしあはれあは  
あはれあはれあはれ中程  
迷ひきめあはれあはれ  
度しを果す身をちめ  
あはれあはれあはれ

廿三





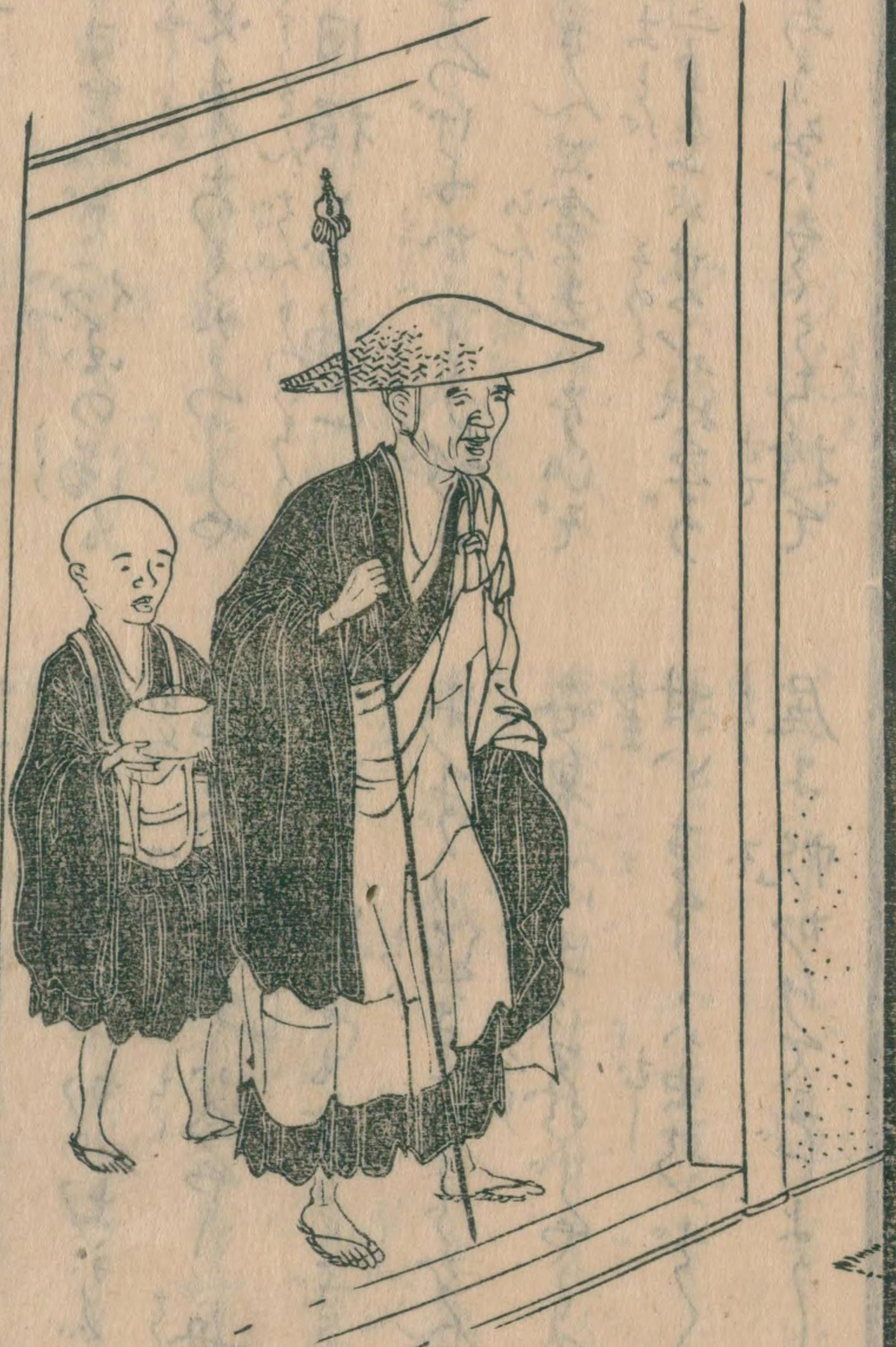
すくはばきば甘ましくおけ  
よとひまづぬる人丁も裏を  
かよかへもが常任不更  
西とせのつてまへわうば  
まゐの却い唯心浄土  
ハふれ家の甘まきには  
寺もやがぶしぬお法の道ハ  
悟やそしやとそえた胸を  
たましきんせよ皆口おじや  
丸めさんきや心の角を

波をたふもして水はな  
衣裏に宝珠を持たがら  
まろで葉をつむぎを  
行がゆくやどきをさう  
八家たふの道まら  
念念まの御まら  
まらずまぬむよある  
をしていそまば戻も  
鼻で暖まる人ハな  
すくま界まきまがはく

角がなまらばナシく自を  
中のよひの五のむじよ  
深山槍のあ乃友がハ  
我懐我執をほごす毎ハ  
欲乃川上君もそころや  
飛ものつごい心をとや  
人のよわくし甘隙  
人のたがきを経まきふ  
因果歴おそくそま  
男の病をそくけあの本佛

めがふ月口は詠ハ  
君づつとやをそゆるせ  
くもともやして身を  
欲乃河津よとそえ  
雲のけがががんひき  
葎のすき業がはとそ  
又よまが心を改めよ  
あてくろぬむひのけ  
嫁入きしころや孫をだ  
助けまんとせり急佛



















無常の空しく度し難しとや。おとしふ女人は  
五障之障とて。飛ぶべき身をば。大士の世に  
あしきも。いづれ。流轉生死の苦を脱ぶべきや。  
洗ふたよとむ。まゝ大士乃思波なる。滄溟の  
を以てかゆとも。弘誓の海に。海をぬりて。志  
んや。ぬくあふぎあふぎ。あつく。そん  
べ。まゝ。初縁の門出を。見さるやと。臨院袋  
を。採り。いさど。たぐひ。移りのぬけがりの。まて。  
い。ま。り。せ。ば。せ。め。て。ふ。と。て。は。と。な。れ。た。こ。の。ま。ふ  
を。つ。つ。移。て。

遠をの山を免ぐして。ぬく。おむ。佛をのが。心ぞ。一  
耳。き。目。そ。て。ま。れ。を。こ。る。ま。ぞ。誅の。親。自。を。た。り  
○  
○  
旅衣きて。れ。め。い。ま。き。ぬ。き。親の。情。乃。ふ。り。き。誅。を

た。と。後。う。ぬ。こ。が。心。一。と。八。首  
お。と。ろ。ぬ。我。あ。後。も。う。か。り。を。終。ら。う。た。を。せ  
を。ば。夢。と。ん。な。ら。う。さ。ま。ば。執。ふ。の。執。あ。う。て。  
せ。路。ふ。ほ。こ。る。と。し。ん。と。も。夕。う。い。ふ。骨。と。なり。た。



草原の栲ぬるる皆人の幸なり。おのれ某のま  
人のせれよかたまふことをおしひ。その身も後ふ  
ゆく道と打おどらまき。予うゝあふの道志る  
をせよとて。

我も又つあふらゆらん道をぐらちちを向く  
歩みぬさなやといと祢もごらういさをもぬ。  
予もいまごとなしむる勢強みぐる。其誠を感ずる  
あまりい。いやしきむれをまをさほもゆ。  
誰ともつあふ行んるぞう。心のまうまを迷そ

誰よあくとおのれぞ迷なるまぬまふ去る方もそ

まの人のまもつ死つするゆふまふまき次まのそと誰

まのままままらてい又もかつるまふ人ふおまう生死いれ

西東少やまの介よまらまら道のあうまらまら

たどつてまなる道よ出ぬまらまらまら







廿





拍ぬも此勢をまづぐりたもつゆがまゝに同なりは君達をん

天北乃内かふあゝぬ身をまきばどちか向ても君が故々

○ 何某の老尼へのふー 四首

何某の老尼、一日予が房ふあゝて曰、あまを  
まが身むごあるうき身をあゝて。七才  
して。父よちかをも。九才に。母よちかをも  
廿才あゝして。まよ離る。子ふちかをも。まよ  
五十歸ふよして。父母の里をもりあはれ。身を浮

身乃よどき人。波のうゆぐりたもつゆがまゝに同なりは君達をん

むくひ。波のせれはますて。おまひんをたてうな

しりも。作ぎまゝに。師乃あゝして。輪廻

の若をせて。周を路をもて。させむと。いと

孫もまらふ。おまひんをたてうな。おまひんをたてうな。

一麻衣のたもまをうふ。おまひんをたてうな。おまひんをたてうな。

若必滅。命もあゝて。命の理ハ。まよきと。おまひんをたてうな。

生と。おまひんをたてうな。誰うけ若を乃が。おまひんをたてうな。

同深乃。おまひんをたてうな。老か。おまひんをたてうな。

又電の。おまひんをたてうな。さ。おまひんをたてうな。









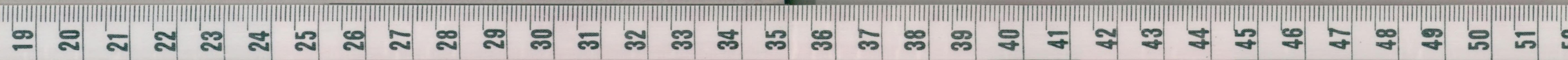
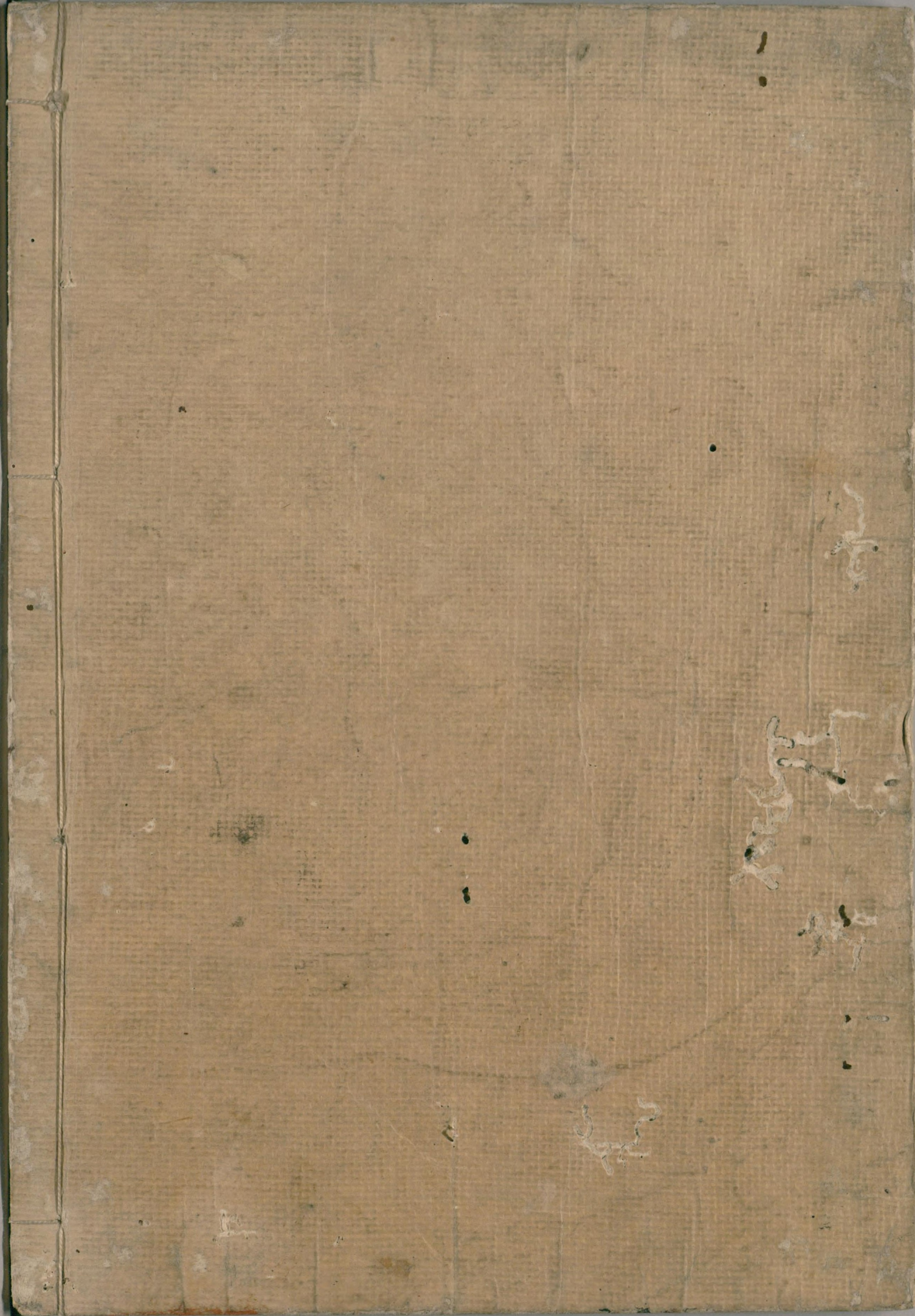
日











国立国会図書館 タイトル『華頂禪師仮名法語』 請求記号 188.84-B98k

ガラス使用